

まちづくり市民会議 まとめ

○役割

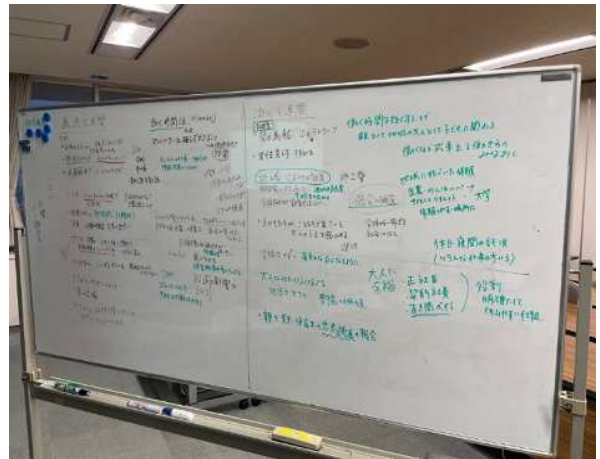
第6次豊橋市総合計画の基本理念である『私たちがつくる 未来をつくる』のもと、後期基本計画の策定にあたっては、行政を取り巻く環境や社会潮流などの変化を踏まえ、多方面から市民意見を確認することで実効性のある計画とするとともに、まちづくりにおける市民の関わり方や役割などを明確にする。

1. 構成

	分野	団体名
1	産業	豊橋商工会議所
2	産業	豊橋農業協同組合
3	大学	豊橋技術科学大学
4	大学	愛知大学
5	大学	豊橋創造大学
6	金融	豊橋信用金庫
7	労働	連合愛知豊橋地域協議会
8	メディア	豊橋ケーブルネットワーク
9	観光	ほの国東三河観光ビューロー
10	協働	豊橋市自治連合会
11	まちづくり	豊橋青年会議所
12	子育て	豊橋保育協会
13	教育	豊橋市小中学校PTA連絡協議会
14	福祉	社会福祉協議会
15	医療	豊橋市医師会
16	多文化共生	国際交流協会
17	交通	豊橋鉄道
18	環境	朝倉川育水フォーラム
19	情報技術	デジタル化推進アドバイザー
20	行政	愛知県東三河総局
21	行政	豊橋市

2. 実施状況

年度	回数	内容
令和6年度	第1回 7月25日	・ 後期基本計画の策定におけるまちづくり市民会議の役割について
	第2回 9月4日	・ 「しごと」に関し、社会潮流、取り巻く環境の変化について ・ 各班から出た意見の共有
	第3回 10月31日	・ 「ひとの流れ」に関し、社会潮流、取り巻く環境の変化について ・ 各班から出た意見の共有
	第4回 11月26日	・ 「子育て・教育環境」に関し、社会潮流、取り巻く環境の変化について ・ 各班から出た意見の共有
	第5回 12月16日	・ 「都市空間」に関し、社会潮流、取り巻く環境の変化について ・ 各班から出た意見の共有
	第6回 3月10日	・ これまでの取組について ・ 次期まちづくり戦略の考え方 ・ 未来をつくる みんなのアクションについて
令和7年度	第1回 7月3日	・ 未来をつくる みんなのアクションについて
	第2回 7月23日	・ 第6次豊橋市総合計画に係る評価分析について
	第3回 8月6日	・ 未来をつくる みんなのアクションについて



3. テーマごとに出た意見（抜粋）及び傾向

（1）「しごと」に関し、社会潮流、取り巻く環境の変化についての意見交換

○この5年のはたらき方

- 働き方が変わった。豊橋は「共働き子育てしやすい街ランキング（2023）」で3位にランクインしているが、魅力発信が下手である。介護現場など人手不足となっている。ヘルパーも高齢化が進み、若い人が入ってもすぐに辞めてしまう。新卒（特に男性）の定着率が低い。「ワークライフバランス」という言葉を聞く様になった。また副業が増えてきたようである。ハラスメントに対しよりシビアになった。外国人のメンタルの相談を非常に受けるようになった。カスタマーハラスメントなどハラスメントの認識が変わってきた。行政や制度の壁で前に進めていない事案が増えており、行政間の壁を取り除いてやっていく必要がある。古い規制も時代に合わせて、制度を変えていく必要がある。コロナをきっかけに、技術革新によりロボットで賄え、人が不要になった業種もあるが、ドライバーなど人が必要なところは人手不足が顕著で、二極化となっている。
- この5年間コロナを経て、テレワークなど働き方が変わってきた。育児や介護に関する休暇についても変わってきた。福利厚生なども使われやすくなった。外国人労働者に関して、外国人の働き手のニーズが増えてきた。5年となるとコロナが出てくるが、自然に関して目を向けてくれる人が増えた。若い新しい働き手に関して、終身雇用で勤め抜く感覚というより、その後のキャリアデザインの場合である感覚で変わってきている。テレワークに関して、マイナンバーで手続きの手間が省けて便利さを感じた。コロナが終息して対面が戻った感がある。情報化に関して、個人情報の保護の課題もある。

○今後5年後

- 10年先のビジョンをイメージして取組を実施する必要がある。一方で未来予測は難しいという意見もあった。技術革新や技術の進歩で人間しかできない仕事（メンタル）は重要なキーワードとなる。豊橋の仕事を豊橋でなくてもできる一方で、東京にいても豊橋の仕事ができるなど地域にしばられなくなるのではないかと。申請などはほぼデジタル化が進み、電車やホテルなどは無人でチェックイン／チェックアウトができる世の中になっていくのではないかと。豊橋市は昔からゆるいまちであり、良さでもあるため今後も継続されつつ、そういったまちであることを知ってもらう必要がある。
- 特定技能など外国人の働き手は言葉の壁がある。働いてもらいたい、難しい部分もある。人材不足に関して職人で腕のある方は70代であったりするため、今後5年で熟練の職人の人口が減ってしまう。

○今後どうしていくべきか

- 人ではなく、AIによって判定することが増えているが、特に人でないとできない部分（特にメンタルの部分）に対し、アプローチや技術を習得する必要がある。目先でなく10年後のライフスタイルを見越して、豊橋しかできないことなど（教育や農業など）新たな価値を見つけていきたい。どこでも仕事ができる時代となっているが、豊橋市は住みやすいまちであるため、豊橋に仕事がなくとも仕事ができるようセットでアピールしたい。
- PRとして、ぬるさはこのままで、豊橋を知っている市民が市民に良さを伝えていく必要がある。さらに技術革新が進むため活用しながら豊橋の仕事の価値を高めていきたい。
- 次の世代を育成し、その業種が滞らないよう継続できるようにするのが重要である。外国人人材は言葉の壁や地域性で身近に感じられない部分があり、コミュニケーション能力の向上や市民の方にも感覚や理解を得てもらう必要がある。デジタルリテラシー向上、デジタル化を進めていく中で経営者が理解を持って進めていかなければならない。若い方が豊橋に定着してもらうために、会社でのやりがいや働きがいをアピールする必要がある。

(2)「ひとの流れ」に関し、社会潮流、取り巻く環境の変化についての意見交換

- PTA は非常に風当たりが強くなってきた。一方で PTA は学校と親をつなぐ大切な団体である。公立と私立で多少関わり方が違うが、希薄になっている中で様々な人を巻き込んで関わってもらう取組を進めている。
- 自治会は完全にボランティアで担い手不足になっている。一方、働き手の高齢化、定年延長など仕事をしている人が多く、なかなか自治会に入ってもらえず人手不足につながっている。ある自治会で解散したケースがあったが、市内の全自治会が解散してしまうと行政も成り立たなくなってしまうため、豊橋のまちづくりとして自治会の維持は大切である。
- 地域のコミュニティに関して、福祉協議会は地域の力をかりて福祉を進めている。自治会がなくなるとこれから増えていく高齢者の対策が非常に厳しい状況になる。また、ヘルパーやケアマネジャーの担い手不足が問題になっている。
- 地元で名の通った企業でも現在は内定辞退も多く、10 人採用するには 100 人程度に内定を出さないといけないう状況もあると伺った。市内で就職してもらうために地域の愛着を育む教育を小さい頃から実施していくことが重要である。そのための検討として、わかば会議などから若者の意見、女性の視点での意見を聞いていくことが重要である。
- 直近 5 年の大きな環境変化としてコロナ禍があった。動きたくても動けない中で人を避ける動きが主流だったが、元に戻りつつある。
- 移住・定住施策は結局のところ国内の人の取り合いと言える。今後は関係人口について議論していく必要がある。観光ではない関わり方として、自分の好きなことと地域を掛け合わせて関係人口を増やすことが大切である。アイアンマンレース、のんほいパークの生物の展示やバックヤードにある貴重な資料をもっと開放して人を呼べないか。サーフィン、駅前の磨き上げなどまだまだポテンシャルが高い資源もたくさんある。
- 環境面では、汐川干潟や葦毛湿原などには遠くからでも人が集まる可能性があるため、PR が大切である。
- 人の流れと仕事環境は結びつきが強い。現在製造業の調子が良いが、人の出入りは企業の業績による。近年転職が増えており、入社してから 3 年から 10 年の間で人も変わっている傾向もある。また、通勤時間（仕事に関わる時間）の要する時間が多いと転居につながる。そのため、地元の魅力ある企業があれば、豊橋に住んでくれる可能性も高まり、企業誘致も重要である。
- 名古屋で安定した事業をするために事業所を移転するところも出てきた。特に技術が必要な仕事はなかなか若者が続けづらいため、若者を支援する必要がある。仕事やまちの利便性（道路・インフラなど）が整っていないといけない。
- 地域のコミュニティを維持していくためには、地域の宝を掘り起こし、若者に早いうちから魅力や良さを伝えていく必要がある。合わせて、人同士のつながりを大切にする政策が大切である。
- コロナ禍を経て、観光に関しては回復傾向である。
- 外国人居住者は過去最高の 21,000 人を超えている。今まではブラジルやフィリピンなどの日系が多かったが、その構成も変化してきた。ベトナムやインドネシアの技能実習では日本語が理解できる状態で来日する人が増えている。
- 生活面では、大型ショッピングセンター（イオン）が豊川や岡崎にはあるが、豊橋にはない。昔にさかのぼると、何かをするために豊橋に来てくれていた時代は豊橋にもぎわっていた。
- 電話での問い合わせが減りインターネットでの問い合わせが増えた。コロナ禍の影響で家にいる時間が増えてインターネットの利用が増えたのも要因だが、インターネットを使いながら生活することに重きが置かれているイメージである。ネットスーパーも増え、若い方は SNS など自分で調べて行動している。テレワークも増え、オンライン会議が主流とも言える。豊橋に住みながら様々な環境で仕事ができると良い。
- 豊橋は農業が盛んだが、従事する方が減ってきた。農業に興味を持っている人は多い。食彩村では客も多く、ガーデニングなどのイベントもあるが、興味を持つ若い世代や家族に情報が届いていない。
- まちなかでは emCAMPUS ができ、人が集まる場所ができたことは良い。emCAMPUS には図書館が入っているため、学生が集まる拠点できた。

- ここ5年間でインターネットを使って情報を探す人、自分に合った情報を見つけていく人が増えてきた中で、今まで豊橋の駅前に目的を持ってきていた人が減っている。人口もそこまで減っていないに関わらず、人の流れが変わってしまった。出かける場所も変わってきている。まちなかの活性化は重要ではあるが、市の郊外も含めた様々なコンテンツを繋げて周遊する方策を検討する必要もある。
- 情報の発信やPRについて、どのような視点で豊橋をPRするか、ターゲットを絞った展開も必要である。生活に根差した魅力、人となりを交えながら身近な話題をアピールするのも必要である。豊橋はPRが下手だが、積極的でないところも良さとしてPRできないか。また、のんほいパークなどには勉強の素材が充実しており、子育て環境のPRにも活用できるのではないか。その他、新幹線が停車すること、家賃も安いことなども豊橋の良さとして（アピールしづらい魅力だが）PRできるのではないか。

(3)「子育て・教育環境」に関し、社会潮流、取り巻く環境の変化についての意見交換

- 人口減少という観点では、1 学級の人数の減少や外で遊ぶ子どもの減少が挙げられた。また、昔は様々な学年が一緒に遊んでいたが、そういった機会は少なく大人と一緒に遊ぶ子どもが増えたとの指摘があった。外国人の子どもという意味では、環境教育を実施する中、その多さを実感されているとの声もあった。
- 嵩山小学校でのゲンジボタルを増やす取組は非常によい。小学 4 年生で学び、自分で育て、次の世代に教える仕組みがある。児童の自主性を育む好事例であると認識している。
- コロナ禍を経て、学びの仕方が変化した。アフターコロナでは環境教育が増え、「子どもがやりたいことを応援する」という風潮が出てきている。一方で、タブレット等のデジタルを活用した学習が増えているが、アイテムだけが手元にあり、活用の仕方を理解していないとの指摘があった。デジタル分野においても共助プログラムを組み込んだ教育環境の創出が求められる。
- 子育てと仕事の両立に向けては、病気や夜間に預けられる場所があるとよいという指摘があった。地域社会全体でこういった子どもを支えることが重要である。
- 幼児教育においても動画等であやす場面があるが、その行為（動画を見る＝一方的に情報を与える）によって、他人と議論する力やコミュニケーション能力が低下してしまう恐れがあると指摘いただいた。
- 豊橋らしい教育（幼児、小・中・高等）を通じて、豊橋を好きになってもらうことで、将来的に帰郷する可能性が高まる。一方、小学校以降の豊橋の教育は「お金をかけにくい（かける場所がない）」という特徴がある。
- 豊橋らしい子育て・教育の魅力（町内会や各コミュニティの人の温かさ等）を整理して、（主として都市部の人たちに対して）PR すべきだと認識した。また、富山市の事例から子育て×まちづくりのポイントの示唆を得た。工場を誘致するだけでなく、公共交通を整備し、その沿線の居住環境を高めることが重要である。まちづくりで最も重要なことは「意志」を持つことである。
- コロナやデジタル化の進展に伴い、教育においてのコミュニティが狭くなっている一方で、「個性」や「五感」の重要性がさらに高まっている。そのような背景の中で、地域全体で子どもを育てていく（地域の子は宝）必要がある。
- 子育て以前の問題として、未婚率の高さが挙げられる。特に地縁のない人で顕著である。
- 直近 5 年の影響としては、コロナ禍の影響により人との距離をとることが必須となったことが生活環境や生活スタイルに大きく影響を及ぼしたと認識している。
- 学校教育においては、GIGA スクールなどオンライン教育によりコミュニケーションの取り方が変わった。また、部活動消滅、部活回数の減少、学校の先生の働き方改革もあり、先生と子どものコミュニケーションも減少した。合わせて、コロナ禍により PTA 活動も減少した。コロナ禍が明けて以前のような関係に戻そうという学校と、減らした活動のままというところと二極化している。PTA は先生と親とをつないで子どもに還元する役割もあり、子どもへの教育環境の還元の低下が懸念される。そのような中で市が取組んでいる「のびるん de スクール」は、保護者のニーズとずれているのではないかと指摘もあった。
- 子育て支援においてはファミリーサポート支援、集いの場などの充実した活動の事例も紹介された。
- 保育の現場では、核家族化にコロナ禍も重なり、世代間での継承などもなく保護者が園に頼りがちという印象もある。園と親との関係がフレンドリーではあるが、園の負担が大きくなる懸念もあり、すべて良いということでもなさそう。報道や SNS の影響も大きい。簡単に情報に踊らされている印象もあり、情報の取捨選択を個人で家庭でもしっかりとやっていただく必要性が高くなっている。

- 今後5年に向けてというテーマでは、働く時間軽減に向けて、マンパワーに頼らなくても良いところに投資をしていく必要がある。AI やロボットなども投資先のひとつだろう。働く時間が削減出来たら親として地域の大人として子ども関わっていくことが必要で、努力義務として会社で決めて取組むなど、半ば強制的にでも最初の一步を踏み出す必要がある。これらの課題は産業界をあげて取組んでいく必要がある。ひとつの例として、正社員、契約社員、アルバイトで役割や働き方を明確にして時間の短縮に努めている事例も挙げられた。県民の日があつたが休む人はほとんどいないという現状がある。特に保護者が休めないし、休まない。大人にゆとりがないと実施できないため、働き方改革が重要である。
- 地域ぐるみの教育について、学校だけが教育の現場ではなく、自治会や PTA もそのひとつである。体験型の学びが出来ること、地域を学びの場とすることが重要で、子どもたちがいろいろな大人からの支えを感じて郷土愛を育ませていくことが重要である。一例として、自治会、PTA の負担軽減に向けて、中高生の参加が見られる自治体もあるとのこと。多様な世代も参加できる仕組みづくりも必要である。
- 学校教育については、学校ですごす時間が長い子どもに対して、先生との意思疎通、先生と親との意思疎通の充実のために、コロナ禍を経た関係の再構築が必要である。

(4)「都市空間（インフラ等）」に関し、社会潮流、取り巻く環境の変化についての意見交換

- 5 年の変化として、街なかには再開発が進んでおり、エムキャンパス、まちなか図書館など、時間を過ごせる場所ができた。
- まちなか以外では、ミラまちや湖西市とのバスなど取組が進んでいる。郊外ではスマート IC の開発の動きあり、今後、アクセス道路もどうなっていくのか関心が高い。
- 郊外では空き家は増えているが、創業者からビジネスなどのニーズもあり、新築するより空き家を利活用したいという意向もある。
- 柿の里バス（コミュニティバス）に関してコロナ前は一般の高齢者と園児が相乗りしていたが、コロナ後にサービスがなくなった。利用者がいないと今後なくなる可能性もあり、公共交通サービスは積極的に使っていく必要がある。
- 開発が進み箱ものはできているが、実際にはテナントの入居状況は厳しいのではないかと。日曜日の夜、駅前や飲み屋に人がいない。2007 年のリーマンショック前は活気があったが、その後衰退しているためまちに元気がない。
- 名古屋市など都市部に医療の担い手が流れ、地方の担い手は少なくなっている。豊橋市でも同様にここ数年は小児科や産婦人科の開業はなく、医療が脆弱化される懸念がある。ここ数年は開業より閉業の方が多い傾向である。
- 豊橋の公園は雑草など管理上の問題もあるが寂しい状況である。高齢者や大人がくつろげるような公園が少ない。
- 中核都市として新幹線などアクセスの拠点としては良いが（豊田市、岡崎市より優れている）、駅前にマンションやホテルのみで寂しい。
- 環境に関して、ここ 5 年の大きな変化としてカーボンニュートラルの動きである。企業も温室効果ガスの減少に力を入れている。太陽光発電を導入すると不安定になるが、蓄電の技術に力を入れたりする企業もある。銀行も支援、サポートの動きがある。
- グリーンインフラ（屋内緑化や郊外の開発など）など自然の力を活かして災害を抑制できるように注力する必要がある。行政がグリーンインフラや SDGs などの耳あたりが良い言葉を入れるが、形だけになっていないか懸念がある。今後グリーンインフラには本気で取り組まなければならない。
- デジタルをどのように使うのか考える力を養っていく必要がある。例えば、豊橋が進めている 3D 地図に希少種や環境資源のデータを組み込み、開発時に希少種にも考慮して開発を進めるなど、デジタルの技術を活用しながらグリーンインフラや環境技術で街づくりを進め、豊橋モデルのまちづくりをしてはどうか。
- 「都市の空気感を大切にしたいまちづくり」が、今後の基盤整備に求められる。
- 豊橋市在住の高齢者や従業員に話を聞くと、車がないと不便ときく。
- 介護予防サロンを市内 48 校区で実施するなど、地域で支え合いをする体制が整ってきている。活動する会場も豊橋生涯学習センターなどあるため恵まれている。
- 豊橋市内ではここ数年 Wi-Fi スポットが増えた。外国人（技能実習生）は、携帯電話（スマホ）はキャリアではなく、Wi-Fi モデルを使用していることもあり、Wi-Fi の充実が不可欠である。近年スマホの所有率も増えてきて翻訳機能も進歩してきている。
- 街の空間に関して、街なかには歩道や駐輪場が整備されてきている。自転車専用道路もあるが、交通インフラを整備されている一方で、車との接触が懸念されている。
- 豊橋市は車社会であるため朝の通勤時渋滞がひどい。企業によってはエコ通勤（自転車などの通勤）を取り入れているようだ。
- 交通に関して、最近ではバスロケーションシステム（バスが現在どこを走っているのか）が導入され便利になった。路線バスは複雑であるため、いざ高齢者が乗る際わかりにくいと感じる。
- 公共交通でキャッシュレスの導入が進んでいる。昔は車だったが、バスや公共交通に変えた人もいた。キャッシュレスも様々あることからシンプルに統一して欲しいという要望もあった。

- マンションが増えた印象である。住んでいるのか投資目的かは不明である。住んで使われるマンションが増えるのが理想である。一方で、マンションの弊害として住民間のコミュニケーションが不足する懸念がある。特に災害時に関わってくるが、顔の見える関係が必要である。マンションに限らずインフラ全体で住生活を見据えて整備していく必要がある。行政が作成する計画は統一的な方向性を示しがちであるが、地域によっては実状が違う（街なかや車が必要な地域など）ため、地域の特性に応じた整備が必要である。
- 高師緑地公園の隣に積水ハウスがミラまちを整備しているが、コンパクトシティのモデルケースになるのではないか。
- 公園に関して、数は多いが手入れができていない。過去に公園や道路に緑を増やすために樹木を植えたが手入れされていない。中央分離帯はコンクリートで埋めるのが主流になってきている。
- 今後の移動手段としてライドシェアなども主流になると想定され、本当に車に乗る必要があるのか、車を持つ必要があるのかなど生活習慣を見直す機会の提供が必要である。豊橋市では実現しないが、東京では1日1万歩歩いたりしている。
- 公園もそうだが、地域でできることはできるだけ地域でするように意識改革をしていくべきである。自分達の地域は自分達で守ることを特に若い世代で再認識する必要がある。
- 情報化、デジタル化が進むにつれてデジタル弱者が増えてしまう現状であり、取り残されないようなケアも必要である。

4. 次期まちづくり戦略の考え方について

しごとづくり

- ・ 一人ひとりができることとなると難しい。デジタル技術の活用といった話も出ているが、豊橋市の人は保守的なところがあり、もっと新しいことに積極的に取り組むべき。最近はA Iとか、いろいろあって苦手意識があったり、必要性を感じないかもしれないが、新しいことを面白がる、ちょっとやってみようと思うことが必要だ。
- ・ 豊橋市は身近なところに外国人が多い。普段から生活の中に引き込む、共存する。せっかく多文化に触れる機会があるため一歩踏み出してもらうのはどうか。子ども（小学生）の頃から意欲が持てるようにするのがいい。小さい時ほど触れ合うことが大事。
- ・ 自虐的に「豊橋市には何もない」と言ったりしないことが大事だ。
- ・ 一人ひとりというテーマが難しく回答が出せない。仕事の中で感じたことや思ったことがあれば、それを行動に移すことによっての「一人ひとり」ということしか思い浮かばない。無理にここで回答を出そうとすることがとても難しい。
- ・ これまでの取組を読んだが、共通点として挨拶が必ず出てきており、挨拶がとても大切だと認識した。外国人で言葉が通じなくても毎日言い続ければなんとなくわかってくる。そこからコミュニケーションが生まれ、何かあったときに「助けて」と発信しやすくなる。
- ・ 仕事において、週に1人は新しい人に出会う、週に1回は新しい場所に行ってみる。それだけでも変わってくるのではないかと。社内にいるだけでは気づかない問題、例えば外国人や介護など、いろんな問題を抱えている人に接触すると視野が広がることに繋がる。
- ・ 一人ひとりの意味が抽象的過ぎて答えを導き出せない。これまでの意見をもとに誰が誰に何を届けるのか、何をすべきなのかという仮説を立てるのであれば、
- ・ ゲームが好きな子どもが、ゲームをやったりデバイスを使うことによりこんなことができるんだ、とそこから農業に興味をもつ可能性が生まれるのではないかと。誰が誰にという間が大切。
- ・ 東三河の企業体力が減ってきている。日本経済の発展が停滞しているため、人材投資の資金が不足して教えることができない。メインで働いている人たちは高齢になっていて、高い給与を払わなければならない、企業経営を圧迫することになる。その結果、誰にも伝承していかないという負のスパイラルに陥ってしまう。20代、30代にバトンを渡さないといけないのに、50代や60代の年配者がやっている。世の中全体がそうなっているのではないかと感じている。
- ・ 市民会議で一番議論すべきは人口減少であるが、人口減少は自然減と社会減に分けられる。自然減は食い止めることは難しいため、食い止めるとしたらいかに転出を防ぎ、転入を増やすかではないか。転入を増やすためには仕事が非常に重要であるが、一人ひとりが仕事を増やしていくのは困難だ。勤務先を充実させたり、ベンチャー支援を推し進めていけば転入増が期待できるのだが、まずはなぜ出ていくのか、なぜ入ってくるのかをしっかりと見極めることが重要だ。産業誘致や産業創出などの大きな話よりも、個人が豊橋市で働きたくなる環境がないと豊橋市にいる理由が見つからない。
- ・ 移住と転入は一緒の位置づけと思うが、なぜ移住を外すのか。豊橋市民であることを誇りに思えるかどうかによって、ここに残るか、あるいは引っ越してくるかのポイントとなるため、とても重要なことだと思う。豊橋市はいいところだ、豊橋市を誇りに思う、豊橋市においてよ、という人を育てていくことが必要だ。しかし、現状の豊橋市は対外的なイメージがよくない。市民一人ひとりが子どものころから豊橋市はいいところというイメージを持つことが大事だ。
- ・ 一人ひとりができることを考えるのは難しい。根本的に豊橋市を誇りに思えるということや、魅力は何かといったことが、どの分野にも共通してくる。「だも豊（だもんで豊橋が好きって言っとるじゃん!）」はよくできた本で面白くてためになる。本を読むと、食べてみたい、やってみたいと思えてくる。子どもでも（その内容に）スッと入っていけるので一人ひとりが読むといい。「広報とよはし」に掲載されているが、少しずつでも普及していくといい。農産物や伝統工芸品、豊橋市のひとのことが詰まっている。学校で取り入れるなどしてもいい。
- ・ 子どものころからという話があったが、子どもにとっての世界は学校と家だと思う。子どもと「豊橋

市ではこんな仕事ができる」や「こういうことに役に立っている」といった会話をできる環境を親が作っていかないといけない。豊橋市の農産物を買うとか、学校の書道では豊橋筆を使うとかできれば、そのことをきっかけに豊橋市をもっと知りたいと思うようになるのではないかと。「豊橋市には何も無い」と言わないようにするのは大事だ。

- ・ 自分たちが学校に行っていた時と比べて子どもが少なくなっている。高校は募集人員の減少が著しい。空き教室をどうするか、学校の統廃合をどうするかという話ばかりが話題に上る。
- ・ 事務職であっても人手が足りない。仕事が増えても人手が足りないという状況はどの業種でもあることだと思う。仕事を通じて若い人に教える余裕がない。人手が足りないところは機械化で埋めていけばいいという話もあるがなかなかそうはいかない。
- ・ 外国人労働者の状況も刻一刻と変わってきている。例えば、少し前は、日系ブラジル人が増えてきたが、労働者として豊橋市に来日しているので、生活に余裕がなく、子どもとの時間が十分に取れないことも多い。子どもは働く親の姿をみて夢を見ることができず、自分も親と同じ職業（工場勤務）を選択するケースが多い。
- ・ 最近では、豊橋生まれの外国人が増えてきており、以前ほどではないが、親の子ども教育に関する熱量が非常に変わってきた。
- ・ 言語については、外国人にとってはある意味デメリットだが、学校では日本語、自宅ではポルトガル語と使い分けることで、その他の言語も身につけやすくなる。少なくともバイリンガル、3言語以上を話すことができる可能性は日本人よりも相当高まる。デメリットをメリットに変えていけるような親の考え方があれば、子どもの未来は明るい、そうでない場合の環境が圧倒的に多い。
- ・ 外国人の高校生に対して、様々な職業を紹介する機会があるとよいという声を聞いた。また、バスや電車の運転手という職業についても、アピールできないかというご意見もいただいた。インターンシップなどで、楽しみながら職を知り、学ぶ機会を外国人材に提供できるとよい。
- ・ 本国（ブラジル等）で教師をしていた経験がある方などは、来日後の子どものことを心配することが多い。そういった人は、子どもに対して教育熱心になる傾向がある。
- ・ 子どもがこの地域に定着して、仕事に就くことが理想である。就業体験のほか、「ここにこ」をさらに活用できるとよいと思う。
- ・ 多くの企業が人手不足に悩んでいるが、人手不足を感じさせないようなまちづくりができるとよいと常々思っている。市外への大学進学後、補助金などを活用して豊橋に戻ってきやすいような仕組みづくりが必要である。
- ・ 子どもの未来・夢は何であるのか、と考えながら議論を拝聴していた。将来の夢を尋ねると、ケーキ屋さんなど身近な職業が挙げられるが、バスの運転手や警察官などは挙げられない。体験・経験がないからだ考える。
- ・ 子どもたちがこれからの社会・しごとを支えていくため、しごとに関する環境整備は必要不可欠である。バスや市電などを利用して、運転手や運転士の仕事を見て、体験する。のんほいパークで飼育員の仕事を見て、体験する。そういった体験が重要である。

人の流れづくり

- ・ 豊橋市にはいろいろな素材がいっぱいあるため、それをどうPRするかだと思うのだが、上手くしていない。「だも豊」のようにわかりやすく豊橋市のよさを伝えてくれる人がいるため、豊橋市をもっとよく伝えられるはずだ。
- ・ 人の流れは転入・転出だけでなく、一時的な人の流れでも、情報発信をすれば、もっと多くの人がかきとくれるまちになる可能性は十分にある。地域の宝を掘り起こす、PRのやり方を評価・改善するだけで人が流れてくる可能性がある。名豊バイパスが開通して豊橋市に来てくれる可能性も高まっている。人の流れを作り出す可能性のある観光資源を十分に生かしてPRすることが大切だ。
- ・ 自身のインスタグラムは1.2万人のフォロワーがいるが、フォローバックする基準を決めている。その基準は、しっかり投稿している人であること、あるいは、その人自身が豊橋市のインフルエンサーになってくれそうな人であることだ。（その人たちに）豊橋市や東三河のファンになってもらい、

伝える役割を担ってもらいたいと思っている。(その情報を目にした) 地域の人たちが、豊橋市の魅力を話題にしてくれればいいなと考えながら地道に東三河のファンづくりをしている。豊橋市もそうした活動が必要ではないだろうか。

- ・ 豊橋市も東三河も観光して好きになってもらえれば、定住する可能性が大いにある。知る機会を観光に見出すことができれば、人口減少の課題にも一役買ってもらえると思う。地域の資源をもっと磨いていけばより人が流入してくるはずであり、見せ方の問題ではないか。ただし、地域の人とその役割を担っていかないと、地域資源すら失ってしまい、そうなっては元も子もなくなってしまう。
- ・ 豊橋市ぐらいの都市になると、移住する理由は仕事になるのではないだろうか。豊橋市に行きたいからというよりは、豊橋市が勤務先になるというのが圧倒的に多いと思う。新しい人の流れを作るというのはそういうものではない。
- ・ 心豊かに暮らしたい、農産物が安いところに住みたいなどの理由から家を建てるならば豊橋市にしたいという人は多くはないと思う。そういう人たちを全国各地で呼ぼうとしているのだが、それを豊橋市がする必要があるのだろうか。豊根村や東栄町、設楽町では新しい人が来ると影響はとても大きいのだが、豊橋市は違うのではないだろうか。
- ・ 東三河広域連合設立 10 周年記念イベントで豊橋市に移住してきた人がプレゼンテーションをしたが、こういった取組を豊橋市がやっていくのかと思ったりする。こういった取組は広域連合や東三河がやればいい。豊橋市の場合、違う理由で移住、転勤してくる。例えば、「浜松市に転勤になったが、居心地がいい豊橋市から通勤する」と思える仕掛けづくりが必要ではないか。
- ・ 子育て中の人はお金をかけたくないため、無料施設の情報や口コミ情報をよくみている。「こども未来館ここにこ」は評価が高く、田原市の「親子交流館すくっと」は遠方からも人がきているが、多くが知り合いからの口コミで来ている。子育て世代の人に定住して欲しいのであれば、そういうところでPRしていくべき。
- ・ 一番信頼できる情報は知り合いからの口コミだと思う。発信力あるボス的な役割の人に依頼し、発信してもらうなどすればよいのではないか。
- ・ 愛知大学には豊橋市の魅力的な場所を発信する学生団体がある。立ち上げから2年は自分たちなりに取材してインスタグラムで発信していたが、インフルエンサーに依頼して発信してもらうことによって視聴回数が増えたようだ。
- ・ 豊橋市のよいところは会いたいと思う人に会いやすいことだ。それなりの人口規模でありながらつながりやすい。名古屋市長に会いたいと思っても実際会うのは難しいが、なんとかなりそうに思えるのが豊橋市だ。
- ・ 市内には「まちなか図書館」や「エムキャンパス」など、新しい出会いのできる場がある。学生たちには愛知大学豊橋キャンパスに入学したのであれば、こうした活動をやってみたらよいと声をかけている。
- ・ 「豊橋の人はPR 下手で、発信において気概が少ないのではないか。」と発言されていたことが印象に残っている。
- ・ 豊橋市はよいところで、ポテンシャルが高いまちだと思う。公共交通については市電や豊鉄、名鉄に加えて、新幹線が停車する。地理的条件については、東京と大阪の中間に位置し、ディズニーランドやUSJに日帰り観光が可能な地域である。自然環境については、山、川、海があり、降雪も少ない。農業については温暖な気候を生かし、様々な作物が栽培されている。
- ・ 教育については、以前、愛知大学の周辺が「日本一学校教育の集団が集まっている場所である」とテレビで放送されていた。愛知大学、栄小学校、福岡小学校、保育園、時習館高校、豊橋工科高校、南に行けば豊橋技術科学大学や豊橋創造大学などがある。人柄ものんびりしており、争いごとを好まない人が多い。これらの素晴らしい地域特性を発信する人が少ない。このポテンシャルをうまく発信することで、すべての解決につながると考える。
- ・ トヨタ自動車が輸出拠点としている豊橋港(三河港)もあり、周辺に事業所を構えることで移動の問題が解決できる。二川地域には工業団地があり、企業立地も進んでいる。「公共交通」「自然など地理的条件」「教育」「仕事」の全てを網羅している都市は豊橋であるとPRをしていいはずだが、PRの仕方がわからない人が多いと思う。しごとづくり、人の流れづくり、子育て・教育環境づくり、都市

空間づくりの課題解決に向けては、そういった部分に取り組む必要があると考える。

- ・ 国道 23 号沿いにオープンした「あぐりパーク食彩村」は大盛況である。他地域の人は豊橋の農畜産物をよく知っているが、豊橋市民は知らないことがある。次郎柿は有名だが、ミニトマト、ファーストトマト、大葉は日本一である。また、学校給食での事故による影響を受けているが、うずらの卵についても出荷量は多い。農業や畜産業の分野においても、発信できることは多分にある。農業に限らず、地元の物は地元の人がしっかり PR を行い、地元で使う（消費する）ことが大切である。
- ・ 公共交通機関においても、月々の定額制（3,000 円程度）にすることで、利用者は増えると思う。
- ・ 市民ひとりひとりが豊橋の魅力の活かし方を考えていけば、すべての問題は解決できると考える。
- ・ 「負けイン」の仕掛け人は私である。市内にまちあるきスタンプを 20 か所ほど作り、缶バッチを製作・販売している。豊鉄にも市電と渥美線にて協力していただいている。新城や道の駅 とよはしなどでのポスター掲示や、アニメ放映なども行っている。
- ・ 缶バッチやまちあるきスタンプを目的に市外からの来訪者が多く、調査のため弊社内にもまちあるきスタンプを設置しているが、豊橋駅から弊社（柱六番町）まで歩いてくる人もいる。聖地巡礼を目的とする観光客は、土地勘がないため、公共交通機関を利用しきれていない。こちらの情報発信も必要だが、公共交通機関の案内も必要である。「負けイン」に関するコンテンツはいくつかあり、関係人口を創出している。手ごたえを感じている。
- ・ 公共交通について、まちづくりを考えたときにシビックプライドを高めることが重要である。この地域には魅力的なものが多く集まっている。
- ・ 「路面電車のまち」でいうと、富山市の路面電車を活かしたまちづくりが成功事例として取り上げられる。富山前市長に豊橋で講演をいただいた際、「シビックプライドをいかに醸成していくか」がポイントであるご助言いただいた。富山は新幹線が延伸し、路面電車が目に見える形でリニューアルされたため、ある意味では作りやすかったと思う。
- ・ 豊橋においては、市民ひとりひとりにすでにある恵まれた環境を気づいてもらうことが重要である。「人が集まるところに移動が生まれ、移動が生まれるところにまちが活性化する」と考えている。そういった考え方が「人の流れづくり」にリンクすると考える。これにより、正のスパイラルが発生し、「負けイン」のようなコンテンツが生きてくる。ベースがあった上で、コンテンツが生き、そのコンテンツが新たなコンテンツを呼び込むといった好循環を生むことができる。その結果、当該分野で果たしたい目的につながると思う。
- ・ 以前、豊橋市は「路面電車」「のんほいパーク」「手筒花火」「食（カレーうどん）」の 4 つのコンテンツをシティプロモーションで取り上げていた。豊橋の魅力はこの 4 つだけではないという意見があり、取り下げられてしまったが、そういった議論自体が重要で、発信することに大きな意味がある。

子育て・教育環境づくり

- ・ 他のまちの話を聞くと豊橋市は子育てしやすいと思う。すべてが希望通りにはいかないこともあるかも知れないが、徒歩圏の保育園に入園できたし、学童保育もある。町内会で親同士のライン交換もあり、ここに関してはよいというのが正直なところ。
- ・ 逆にこれをどう維持するか。また、ひょっとしたら、そこからこぼれている人もいるかもしれない。
- ・ 自治会や子ども会に入ることは親の考え次第だ。豊橋市は父親か母親のどちらかが豊橋市出身であることが多く、そういう人は地元の目を気にするので自治会に入らないことはあり得ない。お付き合い上抜けられない。
- ・ コミュニケーションを積極的に取りたがらない人をどうしたらよいか。小学校で「のびるん de スクール」という自由参加のプログラムがある。1 回 300 円ぐらいであったと思うが、初めての人は無料参加できるとよい。地域スポーツや音楽に携わっている人が講師となり、触れ合えるので地域で子どもを支える面がある。
- ・ 子どものころから豊橋市が良いと思う気持ちが芽生えないと、必ず出ていってしまう。洗脳するわけではないが、教育を通じたシティプライド醸成になる。
- ・ 自分が小学校 4 年のときの話だが「とよはし」という教材を使った授業が週 1 回あり、楽しくて仕方

がなかった。農業からまちのことなど豊橋市のことを広く紹介している。小学校4年からヤマサちくわ、中央牛乳、パン屋などの社会見学もした。子どもの心を動かすには、「だも豊」を教科書にして、「全国初のコミックが教科書のまち」とPRしても面白い。

- ・ 全国を旅行すると、子どもが積極的に挨拶してくるまちがあるが、明らかに教育の成果だと思う。すごく気持ちがよく、挨拶一言ができるだけでまちのイメージが凄くよくなる。豊橋市は「530」の意識が広く浸透しているので、絶対にごみを捨てないといった教育が子どもたちに浸透していけばいいまちになるし、誇りにもつながる。長い目でみれば、豊橋市から出ていかない人を育てていくことにもつながる。
- ・ 挨拶は大人が子どもに教えるもので、それだけでも随分変わってくる。
- ・ 「子どもが地域のお年寄りに会ったら自分から挨拶をするように促す」、「子どもと近所を歩きすれ違ったら自分から挨拶する姿を子どもにみせる」、「子ども同士の顔なじみ、町内会の行事にできるだけ参加して地域の大人や子ども同士の顔なじみをつくる」、「登下校の見守りの地域ボランティアに『ありがとう』と挨拶をする習慣をつくる」、「子どもが地域の子どものと一緒に誘って遊ぶ」、「子どもの同級生は気軽に挨拶して、ちょっとした情報交換を日常的に行う」、「学校での出来事や地域の小さなイベントを夕食時の話題にし、家庭でも地域の話題をする」、「学校の先生や地域の人と会ったら子どもと一緒に必ず声をかける」、「外国人の親子と会ったら簡単な日常会話で挨拶やジェスチャーをする」、「子どもが地域の行事に参加したら家で積極的に褒めたりその地域のよさを伝える」などの結果が出た。
- ・ 挨拶が一番大事だと気づくことができた。
- ・ コミュニケーションを取るには「郷土愛」の知識が必要で大事だと思っており、19歳、20歳の人たちでもまだ間に合うと思っている。小・中・高校においてもそのような教育環境ができるといい。
- ・ PTAは活動内容を知られていないという実態がある。学校は教育や社会性を学ばせることが本来の目的であるはずなのに、それ以上のことを求める親が多い。テレビドラマの主人公のイメージが根強く、学校の先生たちは夜遅くまで仕事をするもの、何かあれば先生が解決してくれるものと思っている親が多い。
- ・ 来年度もPTAの役員を務めるが、親という同じ立場で今の親に責任の所在を明確にしたいと考えている。教員や教育委員会は保護者にはものを言えない立場にある。保護者には、「学校と親はそれぞれの立場でそれぞれの責任があり、家庭で行うべき教育を学校に押し付けてはいけない」という話をしている。
- ・ 豊橋市ではイメージ教育など先進的な教育を実施しているが、子育てや教育は親が真剣に入り込む必要がある。PTAでは保護者負担が大きいといった議論もあるが、自身の子どもであるゆえに保護者が負担するべきであると考え。PTA＝学校業務と思われがちで、それが負担になっているのは理解できるが、根本は「子どもの健全な成長」のためであり、進んで参加するべきであると思う。
- ・ 学校に福祉教育などを協力していただいております、豊橋市は意識が高いと感じている。手話などの教室を実施するなど、子ども達が純粋に向き合っていると感じる。
- ・ 余裕をもって子育てができない方々を地域で支え合うために「こども食堂」の運営を支援している。「地域で支え合い」というキーワードはあらゆる分野で言われていることで、高齢者や障がい者、子どもにもあてはまる。これらをまとめて、何か支援できるような仕組みがあるとよい。
- ・ 高齢者については、地域がどんどん縮小しているが、動ける範囲内で支え合えるような仕組みがないと、介護予防のためのサロンにすら行くことができない。高齢者の居場所づくりに子どもの居場所づくりも絡めていけるとよい。行政各課は小地域で取り組む事業を展開しているが、進め方など少し疑念を持つこともある。地域福祉という意味では、高齢者については、CSW（コミュニティソーシャルワーカー）市内18か所の包括支援センターで役割を担っているが、高齢者だけでなく、障がい者・子どもについても進めていただきたいと考えている。
- ・ 豊橋市内ではサッカー大会など各種スポーツ大会が実施されているほか、アントレプレナーシップ教育などを実施されていることは子育ての面で非常によいと感じる。
- ・ 以前は、信用金庫が連携して、夏休みに豊橋技術科学大学を見学するという「真夏の学校」というイ

イベントを開催していた。「体験させる」という目的の達成や、「研究者になりたい」という子どもの夢を叶えるために、このイベントを復活させるとよいのではないかと考える。また、豊橋市と豊橋技術科学大学が連携して、子どもたちが夏休みに技科大を社会科見学できるようなプログラムを提供できると、豊橋ならではの取組になると思う。

- ・ 今まで「部活動」は当たり前存在だったが、部活動が地域に移行され、なくなるかもしれないというのは早急に考えるべき重要な問題である。部活がなくなると授業が終わるや否やすぐに子どもが帰宅してしまい、共働き世帯の場合、子どもの面倒を見られなくなってしまう。また、子どもがスポーツ・文科系の活動に取り組みたいときに、スクール等に通わせる必要があり、送迎や費用の問題が発生すると考えられる。
- ・ 週に3日ほど、無報酬でミニバスケットボールのコーチを行っている社員がいるが、負担が大きいと聞いている。
- ・ 「のびるん de スクール」では、小学生を対象に様々な部活を体験させるという取組を行っている。
- ・ 中学校の部活動が地域に移行された場合、豊橋には「のびるん de スクール」のスキームがあるため、中学生への応用・適用をテーマとした会議に出席している。「のびるん de スクール」は様々なスポーツ・美術・芸術・音楽分野を得意としている市民に講師を依頼し、決められた日時と場所に参加できる人を募って、実施している。
- ・ 小学校では、講師が小学校に出向き実施しているが、中学校では、参加者が出向くというスタイルのため、実施場所が遠いという問題が発生する。自分で行けなければ親が送迎することになるが、それができないというのが実情である。市は講師と場所を提供するだけではなく、行き方（手段）を含めて参加者への対応を考える必要がある。そこまで考えないと、市民の理解は得られないと考える。現状は、思ったほど盛り上がっていないと感じる。保護者にヒアリングをしたところ「送迎」に関する意見が多く出た。学校や地域が行政に対して、もっと声を上げる必要がある。

都市空間づくり

- ・ 公共交通を使おうと言うだけでは便利な車の利用を辞められない。車は部屋着のままで乗れたり、人に聞かれてまずいことを話せる、歌うこともできるが、これらを電車やバスの中でやると迷惑行為になる。公共交通は人の目にふれるところでのマナーを学ぶ場であることを打ち出してもよい。運転免許を返納した人が電動アシスト付き自転車に乗るケースもあるが、事故が起きかねないため事故防止にもなる。このように公共交通に乗ることと何かをセットにしないと便利な方に流れてしまう。公共交通の利用を意識させるのであれば、複合的に言わないといけない。
- ・ 公共交通を使う以前に歩く習慣をつけないといけないと思う。校区内ぐらいいは歩くようにしないと、バス停まで歩くことも億劫になる。校区内の学童まで迎えに行くにも車で行ってしまう。ごみ捨てでさえも車で乗りつけている。校区内ぐらいいの用事であれば歩く習慣をつけるべき。
- ・ 歩いてみると、アスファルトがはがれていたり、草がぼうぼうであったり、交差点が危ないなど、車で移動しては気づかないことに気づく。まちに対する愛着も出てくると思う。
- ・ 富山市のコンパクトシティ、一宮市や岡崎市のウォークアブルシティなど、歩きやすいまちづくりを進めているところがある。豊橋市のまちなかは午前8～9時頃は通勤の車が多いが、市電を活かさない手はない。市役所の職員は全員車通勤を禁止にするぐらいでないといけない。
- ・ 市の施策として「コンパクトシティを目指す」、「ウォークアブルシティを目指す」などの政策をうち出さないと解決しないと思う。富山市ではレンタル自転車の利用環境が整備されていて、仕事で利用している人もよくみかける。路面電車とバスとレンタル自転車でコンパクトシティを実現しようとする意思を感じる。豊橋市にはレンタサイクルが1軒しかないが、これほどの都市でレンタサイクルをやっていないというのは信じられない。まち全体の方向性を政策として考えていく必要がある。
- ・ 交差点の構造が自転車に厳しいまちだと思う。正規のルートで行くと遠回りになるためショートカットし、みんなが交通違反をしてしまう。
- ・ 自転車は左側の車道を走らないといけないが、ルールを知らないで逆走していることが多い。子どもや高齢者は自転車で歩道を走っても構わないというルール、道路の幅によって自転車の走行帯が

決められていたりすることなど、あまり知られていない。

- ・ 豊橋市では自転車用ヘルメットの補助があるので、他の市町村よりは着用率は高いのではないかと。有名なサイクリストがヘルメットのPRをすれば着用率は更に向上すると思う。最近、高齢者でヘルメットを着用している人が増えたと感じている。自転車は高校生が利用することが圧倒的多数のため、この層が着用するようになれば、ずいぶんと変わってくると思う。
- ・ 各地域の公園をきれいにする取組を市民レベルでできるといいと思う。いい公園があるまちはいいまちだというイメージがある。
- ・ 使われている公園とそうでない公園とでずいぶん差がある。高師緑地や幸公園のような大きな公園には人が来ているが、地元の小さな公園でもいいところはたくさんある。それなりに人がいる公園はきれいに整備されているが、そうでない公園は荒れている。
- ・ 身近な公園を利用することを促すべきだ。
- ・ 空き家は他人の家なので勝手に草刈などはできない。土地の所有者が自治会長に依頼してシルバー人材センターに草刈りをやってもらっているところもあるようだが、その気がない所有者は全く手入れをしない。
- ・ 建築費が高騰しているため、これからは新築住宅よりも空き家が注目される。空き家は民有物であるため難しいかもしれないが、利活用できるようにすべきだ。
- ・ 北部地区にある加茂保育園に所属している。自宅は西郷校区（石巻地区）で市内では人口や子どもの数が少ない校区である。賀茂校区はバスが走っていない。
- ・ 医療センターまでのバス（柿の里バス）ルートがあり、高齢者は通院のため利用している人が多いものの、学生は通学の時間帯にちょうどいいバスがなく、利用できない状況である。和田辻のバス停まで送迎し、和田辻からバスに乗車する人、あるいは豊川駅まで送迎し、バスに乗る人も見られる。西郷・賀茂地区は豊川駅利用者が多く、玉川地区あたりまでは豊橋駅を利用する人が多い。
- ・ 以前は柿の里バスに園児が乗車したいと申し出ると、もう1台園児専用のバスを手配してくれたが、コロナ以降、そのシステムがなくなってしまった。豊川駅に柿の里バスが乗り入れるようになったことは利点だが、その結果、バス停の数が少なくなり、運行時刻が変わってしまった。それにより、高齢者が通院の帰りに生涯学習センターに立ち寄り、他的高齢者と交流する機会がなくなってしまった。
- ・ 市街地は市電やバスなどの公共交通機関が充実しているが、ファミリー層が居住し、自家用車を持っているケースが多い。一方、郊外は高齢者のみの世帯が多く、自家用車を持っていないことに加え、公共交通機関も発達していないため、外出する手段がない。近隣住民や親戚の方たちが高齢者の足となり買い物などに連れていっているのが実情である。行政に訴えたところで「利用者がいないから」の返答のみである。利用者がいないから運行本数を減便するといった対応では利用者が増えることはない。
- ・ 和田辻から豊橋駅までは片道 600 円程度かかるため、学生にとっては大きな負担となる。豊川市がコミュニティバスを運行しているが、1 回 100 円で乗車することができる。豊橋市でも同様なことができないかと考えている。都市空間づくりという意味では「郊外」に目を向けてほしい。
- ・ 外国人の方から「消防団に入りたい」という問い合わせを何回か受けたことがある。消防団に入ることと、地域とのつながりができるため、防災の観点でよいことだと思う。ただし、「消防団」が何かあまり知られていないため、アナウンスして認知度向上につなげていけるとよい。
- ・ 年に 1 回防災訓練を実施しているが、自分の校区や地域で実施しないと顔が見える関係づくりにつながらない。地域の防災訓練に参加してほしいと促してはいるものの、外国人に情報が行き届いていない。「組」に入らないと広報とよはしが入らないといった問題も関係していると思う。
- ・ 消防団と地域は密接な関係である。外国人同士はつながりが密接なため、キーパーソンとなる人物に情報が入れば横に広がっていくと考えられる。「組」は嫌がられることが多いが、防災・減災という意味で人命救助につながるため、消防団という切り口で入っていくのがよいと思う。
- ・ 鈴木委員からご指摘があった「市バスの一律料金化」に賛成である。乗車料金が安ければ利用者が増えると思う。
- ・ 毎日、自動車通勤をしている人、高齢者や子ども、免許を持っていない人、観光で来訪している人

などの属性で「都市空間づくり」を整理した方がよいと思う。豊鉄バスの豊橋技科大線が“道の駅とよはし”まで延伸したが、観光客の足となる戦略であると思う。

- ・ 弊社では徒歩通勤もしくは自転車通勤をしている場合、手当（月 6,000 円）を支給している。従業員にとっては会社の近くに住むメリットが大きくなり、会社としては駐車場の確保が必要なくなり、双方にメリットがある。結果として会社の近くに居住する従業員が増えた。対象をもう少し広げて、公共交通機関で通勤した場合にも手当を支給すれば、自動車通勤をする人がさらに減ると推察する。ただし、企業側の負担増となるため、行政から一定の補助があれば企業として公共交通機関の利用を促すことが可能になると思うが、明確なメリットがなければ利用拡大につなげることは難しい。
- ・ キャッシュレスの利用促進について、高齢者にもさほど難しいことではないため、普及することも有用である。妻はバスの通勤定期を持っているが、家族であれば記名人以外の利用が可能で、自身の父と母に利用を促したところ、定期を見せるのみで乗車でき、現金で都度支払う手間がなくなった。以前は自家用車を利用していたが、今では積極的に通勤定期を利用している。
- ・ シンプルな仕組みで、かつ利用者のコストを抑えることができれば、公共交通機関の乗車率は向上すると考える。一方で、高齢者向けの補助は必要である。経済の好循環を生み、財源確保につなげていかないと意味がない。
- ・ みんなのアクションの中に、「公共交通サービスは利用者がいないと今後なくなる可能性がある」とあるが、まさにその通りである。市民の方には公共交通機関がなくなったら、どのような問題が生じるのかをイメージしていただきたい。路面電車は 50 人/1 両、バス 1 路線は 50 人/1 両 乗車できるが、なくなるとどのような問題が生じるだろうか。今よりも渋滞頻度が多くなることは容易に想像ができると思う。
- ・ 公共交通は自動車で移動ができない人のためのサービスである。免許を返納したときに移動手段が自動車しかないまちに住みたいだろうか、といったところまで思いをはせるとどういったまちが大切なかがイメージが湧くと思う。
- ・ 長期的な目線では、まちづくりにおける公共交通はインフラとまでは言わないが、「準インフラ」に値するほど重要な役割を担っていると思う。地域のみなさんが公共交通の果たすべき役割を想像することができるようになれば、豊橋にふさわしい公共交通のあり方が見えてくると考える。
- ・ 一方で、自動車で移動したほうが便利であることも事実である。公共交通機関は乗車料金を支払う必要があることと本数が少ないことといった利便性が悪い側面がある。インフラとして捉えれば、乗車料金を無料にし、本数が増便されれば利用率はあがる。これを最終的な目標として、短期的な目線では 1 乗車に限り無料といったキャンペーンを豊橋市と一緒に実施するなど、長期的なまちづくりの方向性にあわせて、利用者にサービスを提供することで目標が達成できると考える。

その他

- ・ 子育て教育分野での話の際、郷土史の話題があった。以前は中学や高校の先生が地域のことを調査して発表を行ったり、地域の人とチームを作り調査などをしていた。今は児童・生徒の指導に手いっぱいである状態にあるため、これ以上先生にお願いすることは難しいと感じてしまう。
- ・ 学校の図書館に置くだけでもいいのではないか。図書館に「だも豊」をリクエストしたところ置いてもらえたと聞いている。
- ・ 教室に開架することもできると思う。費用はかかるがそういった選択もある。
- ・ 子どもの登校に月 1 回程度、親が歩いてついていくことがあってもいいのではないか。歩く習慣にもなるし、地域の安全・地域の人とも触れ合うことができる。子どもしか知らない道（場所）がわかったり、地域のことを知ることができる。季節に応じてやってもいいのではないか。
- ・ 通学の際の旗当番は親の負担になるため、地域によってはシルバー人材センターへの委託に切り替えたと聞いている。ボランティアの高齢者と交流を持つことができ、地域の子どもと挨拶を交わすこともできるため、元に戻していてもいいのではないかと思う。
- ・ 負担に感じないぐらいの塩梅が肝心だ。少子化によって子どもがいる世帯が少なくなり当番の順番が回ってくるのが早くなっている。これまで 1 か月に 1 回程度しかなかったものが、1 週間に 1 回のペースになってしまうようではよくない。

- ・ 当番表を作るにも電話番号がわからなかったり、地域の子どもの年齢もわからないので大変だと聞いている。
- ・ 子どもは歩くしかできないので、歩調をあわせる機会を作るのもいいかもしれない。
- ・ 行政からの提案は依頼や義務になってしまう。「たまに歩くと楽しいよ」とか、「校区内を歩いてみると意外な発見があるよ」、「1本違う道を曲がってみよう」、「気になる店は入ってみよう」など、ワクワク感じられるような話にしないといけない。
- ・ 違う景色を見るだけでも頭の活性化につながる。

5. 未来をつくる みんなのアクションについて

1 分野：豊かな人間性を備え、未来を創る人が育つまち

- 子どもとしっかり話し合うことを勧める。子どもが何を考えて非行してしまったのかを把握しない限りは解決できない。
- 学校に相談することを勧める。非行の原因がわからないと対処できない。かつて子どもに違和感をもった時に先生に相談したことで解決の道筋が見えたことがあった。まずは学校に相談することが必要だ。
- 専門家に相談することを勧める。かつて同僚が専門家に相談したところ、自分の考え方と異なることがあった。非行の度合いにもよるが、自分の判断では間違えた対応をしてしまうリスクがあるため、専門家による助言を求めたほうが良い。
- 専門家に相談することを勧める。非行にも薬物やバイクの無免許運転のように法を犯しているものから、反抗的な態度といった更生を求めないものまでいろいろある。また、発達障害や社会適正障害など医学的に注意が必要なケースもある。背景を理解したうえで医師や専門家の判断を仰ぐことが必要であろう。
- 非行に走るまでの経緯を教えてもらったうえで助言する。学校で課題を抱えた学生がいた場合、学生相談支援室に行くことを勧めている。教員間で共有すると、似たような境遇の人がいることが確認できたりするため、相談するしくみがあるといい。特に、どのような境遇で生活しているかがわかると、その背景を理解できるようになる。
- 普段から子どもをよくみておく。子どもが非行に走らないためにできることはある。子ども同士でのいざこざはちょっとした原因をきっかけに、それが増幅していつて問題になることがあるため、普段からちょっとした子どもの行動の変化に気づけるようにしておくことが必要だ。
- 経済的・社会的に救済する。ヤングケアラーについても、問題の深さが人によって大きく異なる。かつての教え子で、家庭が経済的に非常に厳しく、家族のために働くために 1 年間休学した。入学金や授業料もすべて自分が工面していた学生がいた。その学生に対して、奨学金を受給できるように支援するとともに、卒業後には家族から独立して外から仕送りするように勧めた。家族とのつながりを部分的に遮断したり、関係を改善させることが必要であるが、外部の人が誘導しないとできない。
- 専門機関や学校に相談する。離婚の増加、助けあい文化の喪失などの社会背景が大きく影響している。各家庭のプライベートな部分が多く、介入リスクが高いため、対応を誤るとトラブルを拡大してしまう懸念があるため、自分自身で何かすることは難しい。
- 大人の目が届く居場所をつくる。母子家庭が増加したことで家に遊びに行くことができない子どもが増えており、その子の誕生日会をわが家で実施したことがあった。居場所のない子どもがいるため、気軽に集まることができて大人が見張ってくれる場所があると素敵だと思う。
- 地域で相談できる人をつくる。目に見えるような状況になっていないだけで、ヤングケアラーと言われる子どもはいくらでもいる。子どもごとに理由は様々であり、親がいる以上助けることはなかなかできないが、子どもが一人で悩まないように、個人情報漏れない形で気軽に相談に行ける人をつくることが大事だ。地域でしか対応できない。
- 子どもの状況を確認する。ゼミ生に対して家庭環境や学費の支払い状況を聞くようにしている。子どもから話しかけやすいように、日頃から環境づくりをしていくことも大事だ。
- 子どもから話を聞く。労働者団体の組合員も様々な悩みを抱えているが、団体として何もできず、話を聞いたうえで専門家に引き合わせるしかない。
- 子ども向け雑誌を購読する。学研の学習と科学（小学生向け学習雑誌）の付録が面白く、それがきっかけで科学に興味を持った。
- 虫捕りをする。上級生に虫捕りに連れていかれたことがきっかけで自然に興味を持った。
- 天体観測をする。天体望遠鏡で天文観測をして感動した。
- 自然を肌で感じるような体験をする。昆虫採集をしたときに、夢中になってトンボやヤゴを捕ったことで興味をもつことになった。海水浴に行って海の広さや深さを感じた。

- 子どものころは豊橋公園や豊川、牟呂用水なども自然だらけであった。豊川で船に乗って前芝に行き海水浴をした。自然で遊ぶことは、いまの子どもたちがゲームをすることと同じ感覚だった。
- 体験する機会を提供する。昆虫が大好きで、昆虫の図鑑を破れるほど読んだ。興味が湧けば、その先を極めたくなる。沖縄の海を子どもに見せると感動する。親が頑張って体験する機会を子どもたちに与えるしかない。
- 子どもの主張を確認するために膝をつき合わせて話し合う。親には話しにくいことを地域の方が代わりに聞けると良い。指摘よりも共感、雑談の中で共感してあげることが重要。
- 何に不満があるのか聞いてあげる。何かしら理由があるはず。話してくれるか分からないが、話を聞く機会は設けてあげたい。子どもなりの社会では我慢していることも家に帰ってきてひどいときはその反動かもしれない。家でも言われると逃げ場がない。
- 親と子の両方の目線で話を聞く。子ども目線では何がつまらなかったのか、面白くなかったのか確認する。親目線では親として子どもとの関係を振り返るように促す。親が子どもの行動を見られていないこともあるため学校の先生への相談も必要。親が理解者となりしっかり話を聞いてあげることが必要。
- 基本は見守り、地域や学校で情報共有も必要。
- 行政や福祉団体など専門的な団体の知見を仰ぐように助言する。外国人のなかには子どもが子どもの面倒を見ているという話をよく聞く。外国人労働者においては文化となっていることもあるため、一概にヤングケアラーと括ってよいかは分からない。
- 何か必要であればお手伝いするよ、くらいは声がけする。文化やしつけと言われたら何も言えないため、声がけするにも注意が必要。場合によっては、第3者が行政に連絡することも必要と考えている。
- みんなで自然に触れる機会を持つ。月食・日食などリアルタイムでしか見られなかったことが興味を持つきっかけになった。めずらしい動植物みつけたら自然史博物館に持って行ったら丁寧に教えてくれる。学びがあると興味をもつ。子どもがみつけたものを一緒に調べる、子どもと一緒に探すことで子どもが興味を持つ。
- 虫取り、魚釣り、竹の子取り。ゾイド（恐竜のおもちゃ）、星空観察や動植物など、まちなかに住んでいたら体験できないことを山などで体験できると興味を持つ。
- 虹、プラネタリウム、など、昔のテレビ番組は不思議なものを扱う番組も多かった。
- 山川海などの幼少期のあそび場は、家庭環境でことなるが、どこであそぶ、どこに連れ行ってもらうなどで興味を持つ範囲も変わってくる。子どもは遊びの天才。冒険のような環境があると良い。

2分野：活力みなぎり、はつらつと働けるまち

- 直売所に出かける地元のスーパー等に出かけて、売場に豊橋産の農産物が陳列されているかをみるとよい。
- スーパーで地元産農産物が手に入るようになる自分でできることはあまりない。地産地消という言葉は誰もが知っているが、認識できるような情報が提供されないと理解できない。道の駅で販売されている農産物に生産者名が書いてあるように、地元スーパーでもそのような販売がなされるとよい。農産物のアンテナショップとなる道の駅は南部にあるが、北部にもできるとよい。
- 食べることに興味を持つ食べるのは好きだが、産地にこだわってはいない。こだわりを持つには、興味を持てることが大切であり、食事を楽しむ余裕のことが必要なのでは。
- 食べ歩きや散策をする。「あんかけスパ」や「ピレーネ」を市外で食べると、豊橋が発祥であることを再認識する。市内を散策すると、冬はキャベツ、夏はトウモロコシや柿が成長していく様子を見ることができ、農業を感じることができる。
- キャリアデザインをしっかりやってもらう。評価のフィードバックをしっかりじっくりやることが大切で、成功に至らなかった場合の改善方策、できた場合に更によくする方法を考えることが、より働きやすい環境づくりに繋がる。
- 柔軟な勤務形態をできる限り認める。フレックス勤務や裁量労働、オンライン勤務、産休・育休や介護休暇など、働きやすい環境をできる限り承認することが必要。
- 時代に合わせて就労環境をアップデートする。その時に合わせた働き方を提供しないといけない。
- いろいろな考え方を認める。職場環境改善の取組を複合的に実施する必要がある。社会情勢は刻々と

変化しているため、今いちばんベストなものに、面倒くさがらずにかえていくことが必要。また、面談に加えて日頃から話をすることも必要。

- フレキシブルに対応する。個人の考えに過度に干渉することなく、フレキシブルに自由度の高い職場づくりをしていくと働きやすくなる。
- 部下とのコミュニケーションを丁寧に行う。職場環境は経営者であれば変えられるものの、管理職では難しい。そうした説明を部下にしっかりしてあげる必要がある。
実務においては、部下が理解しているかを常に確認することが大切。そのうえで上手くやるための助言を適切に行う必要がある。
- 数値化経営を取り入れる。勘と経験だけの経営思想は若い社員には通じない。すべて数値化して根拠づけて説明することが必要。
- 魚介類が食べられる店舗がある。奇麗な景色がみられたり、客船が寄港したり、体験ができたりすることも大切な条件となる。
- 観光要素を加える。クルーズ船が寄港する、金沢のように市場がある、水族館があるといった要素が必要であるが、サーフィンのようにニッチなもので聖地化にするとといった考え方もある。また、豊橋港だけでなく広域で考えたほうがよいかもしれない。そもそも豊橋港を観光の港にしたいのか、自動車を効率よく輸入できる方がよいのか議論が必要だ。
- ついでに立ち寄り仕組みをつくる。豊橋港を発展させたいのであれば、大型客船が寄港できるように中山水道を浚渫することが必要となる。むしろ、豊橋港をメインとするのではなく、シーパレスリゾートなど近隣の施設に出かける。
- 健康に配慮した無添加・無農薬の食物や料理に触れた時、高価格帯だが、美味しいと感じる。また、様々な分野・領域に配慮した商品であるため、持続可能である。需要が増えれば、適正価格に落ち着くだろう。添加物が少なければ、罹患する人が減り、医療費の削減に寄与すると考える。
環境面では、土壌汚染が少ない。農薬を使った食物摂取による糞尿自体が環境汚染となる。
- ちくわなどの豊橋市産の食べ物を食べる。
- 子どもに対して、農業体験の機会を提供することも大切である。
- 「JA 豊橋 グリーンセンター磯辺」で買い物をした時、ハーブを含めて、新鮮かつ種類が豊富で、お手頃な価格帯である。
- キャベツや白菜などは供給状況によって価格が高騰するが、豊橋は栽培地と消費地が比較的近いことから、価格変動が少ない。
- 相手が考えていること、思っていることを包み隠さず話することができるように働きかけることが必要である。
- 状況に応じて、専門家にアドバイスを求める。法的な対処が必要な場合は、内製化せずに社労士や弁護士を活用するとよい。
- メリハリをつける。仕事をするときは仕事をする、休むときは休む、帰るときは帰るなど、区別を明確にすることが大切である。そのためには、社内において情報共有をしっかりと行い、進捗状況を把握しておくこと（透明性の担保）が必要である。
- 情報共有と相互コミュニケーションをしっかりと行い、職場の心の風通しを良くする。仕事のための「仕事」にしない。人生を豊かにするための「仕事」であることを根付かせることも大切である。
- 帰省時など、親戚・知人等に会うときには豊橋市のお土産（ブラックサンダー、つくだ煮）を購入し、渡す。
- お店で食べた美味しかったものをInstagramや口コミに投稿し、情報を拡散する。
- お店に関する感想（よかったところや改善点等）を積極的に伝える。
お客様の声は企業の宝であり、社員のモチベーションアップにつながる。
- 地域全体で地元の企業やお店を応援する流れを作る。
サンヨネは安心・安全面で一定の基準をクリアした商品に対して、ハートマークを付けて他の商品と差別化を図っている。作物の磨き上げや新たな商品開発につながり、自ずと応援する風土が醸成されると考える。
- 地元企業（マッターホーン等）の商品券を買い、配布する。

地元の企業・お店を知らない人が無料で新規開拓できるというメリットがある。まずは行ってみる事が大切である。

3分野：命の安全、心の安心が確保されたまち

- （家族や友人と）地震等の災害が発生した場合の対応（飲食料品や避難等）について、イメージ合わせをしておく。考える「きっかけ」を与えることが重要である。
- 食料や水等の物資供給が一時的に寸断される可能性があるため、その状況をイメージしてもらう。
- 自ら災害時の行動（避難先や避難方法等）に関して情報収集をしておき、他人に共有する。
- 有事に備えて、災害パック（防災グッズ）の購入や耐震診断の受診、住宅ローンの組み直しを促す。
災害パック（防災グッズ）について、市が無償、もしくは安価に世帯配布することで、防災意識の向上に寄与すると考える。その他、TOYO Pay のポイント還元を災害パック配布に置き換えることも有効であると考えられる。
- 火災予防の対策として、老朽化した電化製品のチェックや防火性能の高い壁へのリフォームが考えられる。
- 火災発生時にすぐに避難できるように、1階で就寝してもらうなど、逃げやすい場所で暮らしてもらうようにする。また、避難に関する事前レクチャーをすることで、逃げるイメージを共有しておく。
- 調理などでガス（火）を使う際には目を離さないように指導する。
オール電化の家庭が増えていることから、高齢者に限らず、子どもも火の扱いに慣れていないことが多い。子どもに対する防火・防災教育も重要である。自治会では、火を出さない防災訓練が増えている。昔は火の危なさを体感すること自体が防災訓練の役割・意義だった。社会全体で、「火災」に対して、脆弱になっている。
- 不審者対策として、日頃から目を見て挨拶することを心がけている。顔が見える関係を地域で構築しておくことで、（不審者による）犯罪の抑止力を高めると考える。
- 特殊詐欺対策として、第3者（税理士、弁護士等）によるチェックや情報の2ルート化（例：自分＋妻等）を心がけている。
- 非通知番号や登録していない番号には出ないようにしている。昨今のメールは見出しが巧妙であるため、情報リテラシーの向上に努めている。「〇〇メール・電話に注意しましょう」と行政のHPやSNS等で情報発信（注意喚起）することも有効である。
- 昨今、SNS等を介したロマンス詐欺が多い。「上手い話はない」「おかしい」と思うようにしている。
- 校区ごとに開催されている防災リーダー会への参加を促す。
災害時を見据えて何も備えていない人は災害がどのようなものであるか、どういった悪影響があるかを認識していない。災害に対する意識を高め、防災倉庫の設置場所や避難場所を把握することが大切である。災害時には身内（家族）だけで生き残ることはできない。防災リーダー会に参加することで、地域のつながりの重要性を認識することができる（共助の向上）。
- 応急救護場所や避難所を教える。
- 水や食料などの備蓄やローリングストックを勧める。
- とよはしホットメールへの登録を促す。
- 災害時の集合場所について、日頃から話しておくように勧める。災害時にはスマホ等の情報通信機器が寸断されてしまう可能性があるため、家庭内で情報共有しておくことが大切である。
- ペットを飼っている場合や乳幼児がいる場合の対応について、考えておくように伝える。
- 火災発生時にはすぐに逃げるように伝える。消化活動をすることで、逃げ遅れる可能性がある。近所の人に助けを求めることも大切である。地域全体での対策という意味では、火災時に地域包括支援センターと瞬時に連絡がとれる仕組みがあるとよい。
- 常日頃から近所の人や近くの親族との関係を深め、有事の際に助け合える環境を作っておく。
- 火災予防として、安全装置が付いた器具に取り換えるほか、日頃からコンセントのほこりを除去する。
- ガスの利用を控える。
- 電化製品のエラー音の改良を行う。高齢者にとっては、冷蔵庫や電子レンジなどのエラー音が聞き取りにくいいため、高齢者が聞き取りやすい周波数の音に切り替えることができるとよい。

- 不燃物質（エフフォースター）の基準を見直す。住宅火災による死因は一酸化炭素中毒死が圧倒的に多い。不燃材がその原因になっている。
- 早朝や深夜に一人で出歩かない。
- むやみやたらにアプリやサイトに登録しない。個人情報の流出抑制につながる。
- 履物を多く出しておく等、大家族を装う。高齢者宅には不審な電話や訪問が多くあるため、有効である。
- 怪しい場所には近づかない。
- 身に覚えのない連絡（電話、メール）は放置しておく。本当に用事がある際には複数回連絡してくるはずである。
- 高齢者が電話に出ることができない環境にしている。
- どんなことに対しても、まずは疑ってかかる。不審なメールについては、開かずすぐに削除している。

4分野：みんなで支え合い、笑顔で健やかに暮らせるまち

- ウォーキングやジョギング等の有酸素運動を勧める。登下校の付き添いなど、運動につながるきっかけがあるよい。
- 適切な睡眠時間の確保や早寝・早起きを勧める。
- 糖尿病による身体への影響を適切に伝え、発症を防ぐために飲酒や間食の量を減らすように勧める。
- まずは糖尿病について、知る必要がある。そのために、健康啓発セミナー等の受講を勧める。
- 発症を防ぐためには早期発見が重要である。そのため、定期健診を進める。
- 医師からの注意喚起が最も重要である。そのため、かかりつけ医を持つように勧める。
- 気軽に立ち寄る（集う）ことができる場所が、地域内に少なくとも1ヶ所以上あることが重要である。同じ地域で暮らしている人の顔が思い浮かぶことが最低限必要。
- 地域の情報（身の回りの情報）を気軽に共有できる（横展開できる）環境を整えることが重要である。そういった情報をきかけとして、地域内のある場所に立ち寄る人やお祭りに参加する人が増えるとうい。
- 昨今、新型コロナによる影響や、個人情報流出の懸念（プライバシー保護）等から、人間関係が希薄化している傾向にある。「薄く」「軽く」「ゆるく」つながり直すことが重要である。
- 自治会組織の強化が最も重要である。自治会役員の高齢化や若年層の自治会離れが進んでいる中で、次世代の地域リーダーの確保・育成が喫緊の課題である。地域包括ケアシステムの充実など、行政が地域を守る仕組みも必要。
- 親世代が子どもをあてにできない時代になってきている中においては、同世代のコミュニティづくりが重要である。特に男性は仕事等で多忙で、地域のコミュニティに入り切れていないのが現状。
- 地域での子育て支援等、多世代が自然と交流できる仕組みづくりが重要である。多世代が交流することで、地域文化の継承や新たな担い手の確保・育成に寄与すると考える。行政ができることとして、子育て支援のニーズとシーズ（事業者・団体等）をマッチングさせることが挙げられる。
- 日頃から障害（聴覚、視覚、身体等）への理解を深め、ハード・ソフトの両面において合理的配慮を提供する。小学生や中学生が、教育の一環で障害種別や名前、障害特性を学ぶことも重要である。
- 地域全体で障害者（児）の存在を管理できる体制構築が求められている。一過性にならない支援が重要である。「どこに」「どういった方」が生活しているかを把握することができれば、事業者や専門家が参入しやすい。
- 地域の運動コミュニティに参加頂くよう促す。地域のスポーツコミュニティで適度な運動を市民がやっていくことが必要。世代も踏まえた地域で予防するための企画を作る。
- 生活習慣を見直すように促す。周りも一緒に食生活や運動習慣を見直す機会を設ける。みんなで健康にという観点で取り組む。
- 食生活の改善、適度な運動を進める。働きかけは必要だが、働きかけ方も考えないといけない。本人の意識が変わらないと意味がない。
- 自分ではなく誰かのために頑張ってもらうように促す。本人のやる気が重要。普段の食生活を知らし

める。

- お茶をする。関係が希薄にならないように交流する機会を設ける。せめて両隣、向かいくらいは顔と名前を憶えておくくらいはしたほうが良い。自治会に加入することも重要。他方で、働き世代は地域活動に参加しにくい。
- コミュニティスクールへの参加、町内会や自治会の活性化、地域で子どもを育てるような取組を実施する。今の子どもたちが地域に育ててもらったことを実感できていれば希薄にならないと思う。長期的な視点で取組を実施する必要がある。町内会の役員の固定化も問題があるのではないかな。
- あいさつ、近所付き合いに参加するなど、大人としてのルールを守っていくこと。これらの積み重ねでコミュニティができていく。自治会が肝だと思っている。結果としてお茶できる仲のご近所づきあいであれば希薄になることもないと思う。
- 地域のイベントの実施。週1回のラジオ体操、月1回のごみ拾いなどを企画して顔を合わせる機会を設ける。

5分野：互いを尊重し合い、心豊かに暮らせるまち

- 一緒に参加する。知人に一緒に行くこと、自分が申し込みをすることを伝えてグループで申し込む。豊川市小坂井の文化団体が市の委託事業で定期演奏会をやっているが、事前申し込み者には香月堂のお菓子を配布しており、インセンティブを加えることも必要。
- 誰もが行きたくなるような有名な人を呼ぶ。豊橋市には超メジャー級の有名人はなかなか来ない。誰もが行きたくなるような人を誘致すべき。
- 一緒に参加する。経験がある芸術やスポーツ鑑賞であれば一緒に誘う。そうでない場合は、経験のある友人を紹介する。サバイバルゲームをやっているが、子どもに行きたいとせがまれた親は、どうしていいかわからなかったりする。経験のない人にとっては教えてもらえる人から誘われると参加しやすい。
- 気軽に参加できる企画を勧める。高尚と感じると参加できなくなる。芸術鑑賞でも騒いでも見られる企画、飲食しながらでもいい企画などを開催できるとよい。
- 本当に興味があるならば自分で探す。本当に興味があるならば、情報をキャッチすれば自ら動くのではないかな。
- 町内会や子ども会に誘う。子どもの年齢が近いと子どもを通じて仲良くなる。屋外で食事をする習慣のある国の人であればバーベキューに誘うのもよい。
- 話ができる人、行政を紹介する。日本語が話せるならば支援できる。一番困るのは言葉であり、ニュアンスで伝えようとしても異なる伝わり方をしてしまうため、まずは言葉が分かる人を紹介したほうが良い。
- 地域のイベントに誘う。自分ができることとなると何か誘うぐらいしかできない。スマートフォンがあれば言葉の壁はある程度解消できる。
- まずはお試しの機会を与える。身近な人を誘う、仲の良い人と一緒に行く、詳しい人と一緒に行く、粗品を提供するなど、まずは試してくださいと言うアプローチが行政の対応としては必要。スポーツは運動能力や好き嫌いもあるため勧め方に留意が必要。
- 地域のアマチュアスポーツの観戦や参加か始める。プロではなくアマチュアの観戦や参加であればハードルが下がるのではないかな。勧める際には自分が面白いと思うところを近しい仲間に伝えることから始めるのが重要。
- 異分野との連携。浜松競艇ではダンスキッズなど全く異なるイベントを実施して親を連れてくるなどしていると聞いた。全く異なるイメージを与えながら伝えることも重要。
- 楽しんでいる動画や SNS を活用・紹介する。面白さを知らない人に一生懸命話しても伝わらないが、動画や SNS は伝えやすい、伝わりやすい。単に告知だけでなく目玉になるキャラクターや有名人が紹介すると興味が高まるのではないかな。
- 生活の町内ルールをしっかり伝える。
- 観光地やポイント、イベントなどを教える。
- まずは静観したうえで必要に応じた声かけが良い。積極的にいっても嫌がられる可能性がある。観察しながら少しずつ近づくことの方がお互いに良いのではないかな。

- 文化の違いをお互いに理解することが重要。日本のことを教える際に相手方の国の事情なども聞いて理解を図ることが重要。
- 核になる人から伝えてもらう。自動車の下請け企業などには核になる人がいて情報共有される。会社のルール、地域のルールもその人から伝わるため協力してもらうと良い。
- どういう希望や不安があるのか確認して陰ながら応援する。相手方がお節介に感じないようにしないといけない。
- 権利主張はあっても良いが我慢も必要。自身の権利主張ばかりではなく、受入れる側への配慮も含めて我慢していただく部分があるのではないかな。言い過ぎると差別になるため表現は難しいがお互いの理解が重要。干渉しすぎも良くない。
- 今まで通り普通に接する。立場上、本人の意見を汲んだ対応をせざるを得ないため、社内で遠慮なく言ってくれる環境整備に心がけている。
- のんほいパークに連れていく。打ち解けた雰囲気の中で話を聞くことが必要。のんほいパークは家族で楽しめるため、誘うにはよい場所だと思う。
- LINE を交換する。平仮名がある程度わかる人であれば、LINE を交換してもよい。
- 今までと付き合い方を変えず、話をきく。これまで仕事がしづらかったこともあり得る。我慢しないように聞いてあげたい。保育士は男女の区別のない職場であり無理強いをすることはなく、トイレや休憩室などで不都合があれば仕事しやすいように話し合いをしている。
- まずは飲みに行き話をする。勇気を出して話をしてくれたため、そのことによって距離を取りたくはない。まずは一緒に話をしてお礼を言いたい。また、使用するトイレなど変えて欲しいものはないか相談する。
- 子どものころから過度に意識させない。保育園で男女一緒に着替えることについて子どもは気にしていないが、目隠しを使用するなどして男女分けているところが多い。

6 分野：魅力にあふれ、いきいきとにぎわいあるまち

- まちなかに実際に足を運んで、家族や友人に良し悪しを伝えることで、情報を波及させる。広小路やとぎわ等の商店街を再開発し、自然と人が集まる空間を創り上げることも重要。
- まちなかでの待ち時間に留置のパンフレットを見て、目のついた情報について、家族や友人に伝える。シャトルバスを巡回させるなど、公共交通の利便性を高めること（自家用車以外でも駅前に行きやすい仕掛けづくり）が重要であると考え。その他、質を重視した魅力あるイベントの実施と誘客に向けた PR が肝要。
- 自分の推し動物について、SNS 等で情報発信し、のんほいパークの魅力を伝える。ナイト Zoo 等の特別イベントの実施やグッズ販売等は有効である。その他、珍しい動物の写真展を開催することで、誘客促進につながると考える。
- 非日常感（ナイト Zoo、アルコール提供等）の中で、動物と触れ合える機会を創出することが重要。
- 日頃から（他都市と比べた）豊橋の魅力を考え、言語化し、身の回りの人と共有する。豊橋の魅力として、「新幹線（ひかりを含む）が停車する」、「地の利がいい」、「都市と自然が融合したまち」、「気候が穏やか」等がある。
- 市内外の利用者獲得に向けた情報発信が必要。市民も含めて魅力を知らないため、市内外に具体的な魅力を伝える必要がある。体験企画なども必要。
- SNS、有名人で発信力を高めることが必要。アンバサダーをつけるなどの周知展開が必要。
- 魅力的な展示方法がなされている。展示方法、見せ方が良い点を伝える必要がある。博物館には貴重なものがたくさん収蔵されている。
- 動物園も博物館も全国に誇れる内容で、このようにまとまっている施設は他にはない。イベントがあり常に新鮮さを感じる。秋のメタセコイアの紅葉も美しい。
- 豊橋が一番であることを伝える。友達に雪が降らない・積もらないというと「いいね」と言われる。子どもには一番すごいところを紹介すると良い。
- 豊橋の魅力を伝える。気候、交通（利便性）、山川海、人柄が温厚で優しい、物価が安い、住みやすいなどを伝える。新幹線駅がありながら不動産が安いことも魅力と言える。

- 現場を知ってもらう。色々なところに連れて行って知ってもらう。それぞれが SNS 発信してくれると広がりが出て良い。発信した本人にも愛着が出てくる。豊橋は「暮らすとこ」というようなキーワードも発信すると良い。
- 優しくしてくれたこと、笑顔で会話してくれたこと、ありがたうとお互いに言えたこと。現場の生の声があるのが重要。観光案内所、各観光施設がそのようなマインドを持っているが重要。市民が「ようこそ感」を持っていることが重要。
- 観光客が不安な時に手伝う。
- 市外から来て駐車場に困っている人に駐車場を教える。
- 観光客にこの電車とこのバス乗るならセットでチケット買うと安いなど、お得情報を教える。
- 観光客に観光スポットや飲食店、駐車場などの案内をする。

7分野：自然と共生し、地球環境を大切にすまち

- 家庭内ではこまめな消灯を心がけているほか、集まって過ごすようにしている（冷暖房等の電気代などの節約）。また、LED 電球にするなど、省エネ家電への買替も進めている。
- ガソリン代が高騰しているため、マイカーから公共交通への転換を心がけている。
- EV 車はバッテリーの製造工程や電力供給、廃棄処理の際に環境負荷がかかるため、ハイブリッド車に乗っている。
- 必要なものを必要なだけ購入する。
- 紙ごみやプラスチックごみを減らすために、マイバックやマイはし等を持参する。
- 段ボールがごみになってしまうため、ネットショッピングを控える。
- 雑誌等の本を読む場合には電子媒体（スマホ、PC）を利用するほか、買わずに図書館を利用する。
- 子どもに対して、省エネの目的（必要性）や大切さを伝えている。他人事ではなく、自分事として捉えるマインドセットが必要である。
- 家庭内で使用しているエネルギー量（＝光熱費）を把握する。
- 省エネ家電に買い替える。豊橋市では家庭用エネルギー設備導入補助金を出しているため、有効活用できるとよい。定期的に空調を清掃するなど、稼働効率を高めることが重要である。
- できるだけ家族全員が同じ空間で過ごす。
- 事業所においてオフィスカジュアルを導入する等、体感温度を下げる取組を推進している。
- 家庭内で自らエネルギーを生成する。省エネの時代から太陽光発電や、燃料電池などを活用したエネルギー生成が求められるような時代になってきている。
- ペーパーレス化を推進する。事業所内ではほぼ毎日シュレッダーを稼働させている。紙媒体による回覧等を削減したいと考えている。かつて紙の申込書 20 万枚を保管している場所があったが、電子化をしたことで、従業員の執務室として利用することができている。
- 大きいゴミ袋を買わないようにする（※20L 程度に収める）ほか、ゴミ捨ての際には小分けする。大きいゴミ袋を使うと、その分捨てることのできる量が増えてしまう。
- 日用品を購入する際には詰め替え商品を購入する。
- 生ごみを堆肥化し、畑で活用する。
ごみを“出さない”という視点も重要。ビオ・あつみ エピスリー豊橋店では実践されている。
- マイ〇〇を活用し、不要なものや使い捨て商品は買わない・もらわないようにする。
- 過剰包装の商品を買わないようにする。
- 食材は捨てる部位が出てきてしまうが、食べられるように工夫を凝らす。
例えば、皮が硬い野菜を調理するときはピーラーを使うと薄くむけて便利である。
- 回収ボックスを活用し、再資源化する。循環型社会の観点では、リユース・リサイクルにより、新たな価値を創出することが求められている。
- 高品質で、耐用年数が長いものを買うようにする。値が張るかもしれないが、傷んでしまう（捨ててしまう）機会は減る。
- ティッシュペーパーやトイレットペーパーの過剰利用を控える。

8分野：暮らしの基盤が整った、便利で快適なまち

- 障害者の方の手をいきなり取って案内したり、荷物を持つなどをしないように伝える。自分の思いだけで行動すると、かえって不安に感じさせてしまう。どのようにして欲しいと思っているかを理解したうえで行動させたい。
- 気遣いの必要性を伝える。特別視をしすぎるのもよくないため、子どもへの伝え方はとても難しい。
- 困っている人を見かけたら声をかけて欲しいと伝える。見て見ぬふりだけはしてほしくない。歩道上の黄色のラインは歩くところであり、自転車を止めるときに気を付けるように教える。ただ、あまり特別視することは気持ちいいことではない。
- 目的地を聞くなど困っていないかを確認する。親として伝えるよりも見せることが大事である。実際に声をかけるところを見せて、その後、子どもに理由を説明している。声をかけることはとても勇気があることだと伝える。
- ポイント活用やシェアサイクル利用ができることよい。歩数や距離に応じたポイントが付くアプリを利用して健康になった人の話をきいたことがある。また、観光地のように自転車の乗り捨てができると利用しやすい。
- 自動車を使わないポイントサービスがあれば利用したい。
- 自動車を利用しにくい環境にしてもいい。店舗の駐車場を減らしてはどうか。シャトルバスを運行させたり、歩道を整備するなど、歩きやすい環境ができるとよい。
- 定期的に飲み会を開催する。自動車通勤しているが、飲み会を開催することにより公共交通で通勤する機会が増える。
- 働きかけをする。この距離であれば自転車で行こう、徒歩で行こうと伝える。カナダの人は健康に対する意識が高く、おのずと自動車利用をやめている。
- 親が実践する。子どもに水資源の大切さを伝えたいと、貯めた水で花に水やりをするなど、行動で示すことが大切だ。
- 身近なわかりやすいことを伝える。保育園児であればプールの水がなくなると自分たちが困る。楽しいことや身近でわかることをもって伝える。いまは水をお金で買う時代なので、無駄遣いというのは通じにくい。
- 水源などを見せにいく。ダムとか用水路、井戸などを見せて、何年間に一度は雨が降らないため枯れることがあると伝えている。小学生に浄水場の見学をさせてもよい。
- ちゃんと伝える。子どもにはそのまま伝えて理解してもらうことが大切。
- 水の大切さを見せる。アジアやアフリカで水が不足している地域の現状を見せる。昔は川や井戸から水を汲んで運んでいたことをテレビの時代劇などを通じて伝える。その中で、近年は異常気象が増えており、雨が降らないことがあるかも知れないと伝える。
- ユニバーサルデザインやバリアフリー施設の目的や意義を正しく伝える。
- 相手（障害のある方）の立場をイメージして、自分が同じ状況だった場合に困ることや大変なことを想像するように伝える。ひとつの方法として、目隠し体験をすることも有用である。イメージができれば、道を譲るなど最低限の行動がとれる。
- 安全が確保されているか、落とし物をしていないか等、気を配る（心の中で考える）ように伝える。
- 困っている人に遭遇したら、声をかけ、手を差し伸べるように伝える。時勢柄、困っている人に声をかけるのが難しいことも事実である。相手が助けを求めている可能性もあり得る。赤の他人の場合、過度な声掛けよりも地域全体で見守ること（仕組み）が大切であると考えます。
- 子どもの頃から人に対する優しさ、道徳・倫理観を育てて欲しいと伝える。子ども頃の思いや経験が後年に影響することが多いため、早期の風土醸成が鍵である。
- エコ通勤手当を設ける。こういった手当・制度を設けると、会社の近くに住宅を構える人が増える傾向にある。職住近接が実現し、自ずと自家用車通勤が減る。一方で、悪天候等の際には柔軟に通勤形態を変更できる社内の仕組みづくり（打刻等）が必要である。
- 「自転車」に興味を持ってもらう。自転車に興味・関心がある人は20～30kmであっても、自転車を利用する傾向にある。サイクリング文化を根付かせると、自転車通勤は増えると考えます。
- 子どものころから歩く文化を根付かせる。首都圏や名古屋の人は、30分程度であれば歩くのが当たり

前である。

- コンパクトシティ化を進めるとともに、交通リスクを減らす。現状は目当ての場所（お店等）が遠く、自転車や徒歩で行くことができない。また、道幅が狭い箇所（緊急車両さえも通ることができない）が多く、自転車や徒歩で安全・安心に移動することができない。公共交通の整備・拡充とともに、キャッシュレス化などスムーズに移動できる仕組みも必要である。
- 健康面から自転車・徒歩移動のメリットについて、普及する。健康診断の結果をよくするために必要な運動量を示す。その際に自転車の場合〇時間／日、徒歩の場合〇時間／日といったように定量的に示すと、モチベーションアップにつながる。
- 自動車以外で来店した際にポイントを付与する。地域限定や期間限定など、ミニマムスタートであれば、費用対効果の観点から始めやすい。
- 従業員駐車場を減らす・なくす。「公共交通機関や自転車・徒歩通勤推奨」というメッセージを強く打ち出す。
- 居心地が良く歩きたくなる空間を創り上げる。新アリーナ整備をひとつの契機とできるとよい。豊橋にはうなぎやちくわ、豊橋カレーうどんといった名物グルメが多数あるため、食べ歩きとの組み合わせも効果的だろう。
- 流しっぱなしにしないように伝える。家庭内では子どもが皿洗いをすることも多く、水を使う機会も多い。節度ある使い方を身に付けてもらうことが大切である。
- 水が家庭に届くまでの一連の流れを理解させる。登山の際に湧き水を見ると、感動を覚える。水の源泉を知ってもらうことが大切である。
- 有限性を体験してもらう。例えば、1日〇Lまでしか使えないという制限を設け、日常生活において、いかに水が大切であるかを、身をもって感じてもらう。
- 水道局の職員など専門家に「水は資源であること」を伝えてもらう。日本はあらゆる場所で採水できるため、子どもはその重要性を理解しがたい。世界196か国のうち、水道水をそのまま飲める国はわずか6%（12か国）であることを伝える。
- 水不足で困っている状況（米が不作等）を伝える。